

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531082

研究課題名(和文)最新メディア教育を活用した幼小連携スタートプログラムの開発研究

研究課題名(英文) Developing "Fun with Media!" a Start Program of Media and Information Literacy Education for Japanese Transitional Period Children, Kindergarteners and Elementary School first-graders

研究代表者

駒谷 真美 (KOMAYA, MAMI)

昭和女子大学・生活機構研究科・准教授

研究者番号：20413122

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼児期から児童期への重要な移行期(接続期)である、5歳児の後半(接続期前期)から小学1年生の前半(接続期中・後期)の子ども達を対象に、メディアの「受け手・使い手・作り手・送り手」となり、遊びながら学ぶ、最新メディアを活用した体験学習型の幼小連携スタートプログラムを開発・実践した。本研究で制作した映像教材(タブレットとアプリの基本的操作方法・メディアを活用した表現方法)を用いて、タブレットによるグループの表現活動を行った。その結果、遊びから学びへ発展する協同的体験の多様性が認められ、メディア情報リテラシーの基本概念である「情報を伝える力」を段階的に体得する肝要な契機となっていた。

研究成果の概要(英文)：“Fun with Media!” is a start program for Transitional Period (the time between the second half of the last year of kindergarten and the first term of the first year at elementary school) children, because this period is important for the smooth transition from being a kindergartener to being an elementary school student. The program’s objective is to reinforce children’s basic Media and Information Literacy (MIL) from four viewpoints: the receiver, the user, the creator, and the transmitter.

Participating children learned how to use media, specifically tablets and originally developed educational applications, to create pictures or videos in group activities. Results reveal that the program provided essential opportunities to promote various cooperative experiences ranging from playing to learning, and to notice the key concepts of MIL from four perspectives.

研究分野：教育学・教育工学・人文社会情報学

キーワード：メディア情報リテラシー メディア教育 タブレット端末 幼小連携 表現活動 映像教材開発 幼児教育 児童教育

1. 研究開始当初の背景

本研究における背景として、博士論文「幼児期から児童期におけるメディア・リテラシー教育の開発研究」(駒谷, 2006, お茶の水女子大学大学院)とその発展研究である「接続期を意識したメディア・リテラシー教育の幼小連携カリキュラムの開発と実践」(平成19~21年度 萌芽研究 代表:駒谷真美)から得られた結果を基盤とし、新たにメディア情報リテラシーの視点を取り入れている。

(1) 博士論文の概要

メディアリテラシー(Media Literacy, 以下MLと表記)教育は、1980年代前後から欧米を中心に世界各国で、カリキュラム開発・教員研修・教材制作を伴った実践的取り組みが、政府・研究機関・学校教育現場・コミュニティ・制作者レベルで、社会的・文化的背景を反映しながら、多岐に展開している。しかし、未だ揺籃期の教育であるゆえ、定義・概念・方法論などの理論的枠組みは、包括されておらず、理論の断片化と実践の分散化の混在状態にあった。そこで、博士論文ではMLを「メディアの受け手・使い手・作り手・送り手の立場から、能動的なオーディエンスとして、メディアから得られる情報を主体的に読み解き活用しコミュニケーションを創造する能力」と定義した。そのMLを培うため、幼児期と児童期それぞれの時期に適應したML教育を日本で初めて開発実践し、「ML教育と子どもの生態学的環境モデル」を構築した。マイクロシステム内で、幼児期では家庭環境における保護者との相互作用で、児童期では学校環境における教師や仲間との相互作用によるML教育の有効性を立証した。

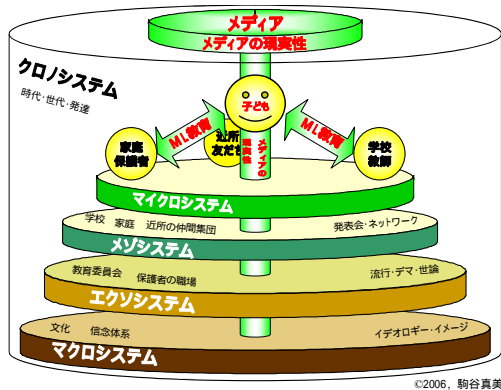


図1 ML教育と子どもの生態学的環境モデル

(2) 萌芽研究の概要

博士論文の結果を反映し、萌芽研究では、幼児期と児童期の教育の間に「発達と学びの連続性」が成立している点を重視し、お茶の水女子大学附属幼稚園と小学校が発案した「幼稚園から小学校への滑らかな接続を達成するための接続期」に着目した幼小連携の視点が肝要と考えた。接続期は、「人との関係や周囲の環境が大きく変化することに伴ない、子ども達の戸惑い・不安・期待・緊張

などを、教師が丁寧に受けとめ支えながら、教師や友だちとの豊かな関わりを基盤に、主体的に学ぶ姿勢を育む時期」(お茶の水女子大学附属幼稚園ら, 2008)であり、ML教育では「メディアの中の空想と現実の理解」が混沌としている時期である。幼児期は、マジックウィンドウ(メディアの世界の事柄を実際の出来事と信じる)の視点を固持しているが、児童期に入り他者視点を獲得していく過程で、徐々にアダルトディスカウント(メディアに対して主体的・批判的読み解きができる)の兆しが出し始める(駒谷, 2006)。ML教育における理解の「いきつもどりつ」経験の蓄積が、協同的経験となり、確かな児童期を保障すると仮定した。文部科学省は、幼小連携において、幼稚園から小学校への円滑な移行を図るために、幼児期と児童期の一貫したカリキュラムの必要性を示唆している。その点も考慮し、萌芽研究では、ML教育において接続期を意識し、幼児期から児童期の統合性と継続性を持つ幼小連携カリキュラム「メディアであそぼ!」を開発した。具体的には、【接続期前期】(年長児後半)プロジェクト「好きな遊びのCMを作ろう!」(グループで遊んでいるCMを作成し発表)【接続期中期】(小学1年入学~ゴールデンウィーク前)プロジェクト「自分CMを作ろう!」(各自自己紹介のCMを作成し発表)【接続期後期】(ゴールデンウィーク後~1学期末)プロジェクト「クラスのニュース番組を作ろう!」(初めてのグループ活動で、入学以降クラスで体験した行事や勉強について、ニュースを作成し発表)を都内の大学附属幼稚園と小学校で実践した。「メディアであそぼ!」は、幼稚園では「ことば」「表現」の領域、小学校では「国語科」に該当する。分析結果から、時期を重ねるごとに、メディア活動の体験を通して「メディアは作られている」というML教育の基本概念に対する気づきが出し、自己表現活動・グループ活動を通して「言語活動の充実」が認められるに至った。萌芽研究で得られた評価から、ML教育が幼小連携の一助になることが示唆された。

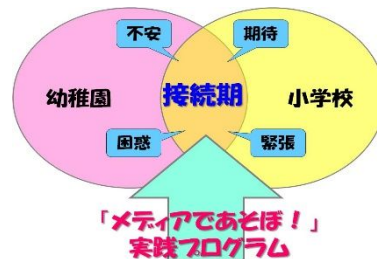


図2 接続期における「メディアであそぼ!」

(3) メディア情報リテラシーの視点

近年、世界のメディア教育の指針を示してきた UNESCO は、各国で細分化されていた ML の定義から新たに「メディア情報リテラシー(Media and Information Literacy, 以下 MIL と表記)」を総合的に構想化し、子ども達が

21 世紀の高度情報化社会を生き抜く市民となるために生涯を通して必要不可欠な総合的能力と定義づけた (UNESCO, 2011)。



図3 The Ecology of MIL: Notions of MIL

UNESCO は、アフリカやアジアの発展途上国中心に、MIL 教育の教員研修カリキュラムを提供しているが、幼児期から児童期における MIL 教育の開発には至っていない。加えて、接続期は、北欧の教育システムでも就学前教育 (フィンランド) やゼロ学年とも呼ばれる就学前クラス (スウェーデン) として、その重要性は認識されているが (河本, 2002; 庄井・中嶋, 2005) 国内外でも MIL 教育の視点を取り入れた幼小連携のプログラムやカリキュラムは、まだ開発されていないのが現状である。

## 2. 研究の目的

そこで、本研究では、5 歳児の後半【接続期前期】から小学 1 年生の前半【接続期中・後期】の子ども達を対象に、メディアの「受け手・使い手・作り手・送り手」の視点から、遊びながら学ぶ、最新メディアを活用した体験学習型の幼小連携プログラム「メディアであそぼ! スタートプログラム編」を開発・実践する。

具体的な目的としては、まず、萌芽研究では予算面で断念せざるを得なかった独自の映像教材を制作することで、スタートプログラムの視覚化を図る。続いて、その教材を活用した表現活動を実践することで、MIL の特徴である「情報 (Information) を伝える力」の獲得を目指す。これは 2011 年度実施の幼稚園教育要領の言葉の領域に新たに示された「他人の話をよく聞き、伝えあう」と、小学校学習指導要領の教育内容に関する主な改善事項として挙げられている「言語活動の充実」に匹敵する (文部科学省, 2008)。幼児教育から初等教育へ発達特性に即した幼小連携スタートプログラムの開発・実践を試みる。

## 3. 研究の方法

(1) 「メディアであそぼ! スタートプログラム編」開発の経緯

平成 23 年度は、萌芽研究のカリキュラムに UNESCO が定義した最新の MIL の構想を加えて精緻化した幼小連携スタートプログラムを企画した。アメリカの国際学会 NAMLE Conference 2011 で、スタートプログラムの枠組みを発表した (5. 主な発表論文等 [学会発表] を参照)。

平成 24 年度は、スタートプログラムを推進するため、研究対象年齢に適したタブレットとアプリの基本的操作方法とメディアを活用した表現方法の 2 種類の映像教材を制作した。本研究者の監修のもと、駿河台大学メディア情報学部間島貞幸准教授と間島研究室の学生達が、操作方法と表現方法の映像制作を担当した。完成した映像教材は、実践で子ども達が使用するタブレットにアップし適宜参照できるようにした。

本研究で使用する最新メディアの選定には、慎重に吟味する必要性が認められた。スマートフォンやタブレットの急激な台頭により、メディアに関わる子どもの生活にも最新メディアが影響を及ぼしていると考えられ、そこで、幼稚園児の保護者対象にアンケート調査を実施した。その結果から、研究対象の幼稚園年長児の多くも日常的にタブレットに接触しており、最新メディアのタブレットとアプリの使用が妥当であると分析できた (駒谷, 2013)。接続期の子ども達のメディア生活に即した最新の教材を制作した。

使用するアプリについては、株式会社 LoiLo から、全面的理解と協力を得て、タブレット用アプリ「ロイロノート」(小学生用の写真・動画・テキスト制作ツール) のパイロット版を無償提供された。使用するタブレットについては、研究協力先の大学附属初等部から 1 クラス分の iPad mini を実践期間中、特別に貸与された。

(2) 「メディアであそぼ! スタートプログラム編」実践の経緯

平成 24 年度後半に、【接続期前期】プロジェクトを研究協力先の都内大学附属幼稚園 2 園に依頼し、それぞれ実践した。映像教材を用いてタブレットによるグループの表現活動を行った。各グループの活動の終始は、IC レコーダーとビデオカメラで記録した。

平成 25 年度は、【接続期前期】で協力してくれた大学附属幼稚園から引き続き、同じ大学附属初等部に依頼し、前年度と同様の流れで、【接続期中・後期】の小学校 1 年生クラスを対象に、タブレットを活用したグループでの表現活動を実践した。各グループの活動の終始は、IC レコーダーとビデオカメラで記録した。【接続期前期】プロジェクトから参加している子ども達も含めた 20 人に事前事後インタビューを行い、IC レコーダーとビデオカメラで記録した。

【接続期前期】【接続期中・後期】プロジェクトの実践では、子ども達の活動前に、教員研修をかねたワークショップを企画実施

した。参加した教員は、タブレットを用い、操作方法と表現方法を学び、実際に制作体験をした。子ども達よりも大人の教員の方が、最新メディアに対する親和性が低い。そこで、教員の不安や先入観を払拭するためにも、MIL 教育の概念や教授法を知ってもらう機会が必要であった。教員研修には、駿河台大学メディア情報学部の学生、昭和女子大学初等教育学科の学生、玉川大学の学生も参加した。実践では、教員と学生達は、共にファシリテーターとして子ども達の活動を援助した。

平成 26 年度は、全実践記録とインタビューのテープ起こしから、結果の質的分析を行った。韓国の国際学会 ICoME 2014 にて、その成果をダイジェスト版のビデオを紹介しながら発表した(5. 主な発表論文等を参照)。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究の主な成果

「メディアであそぼ！スタートプログラム編」開発の成果

プログラム開発段階の成果としては、「メディアであそぼ！スタートプログラム」独自の映像教材(操作方法・表現方法)を制作し、プログラムを体系化かつ視覚化した点が挙げられる。

MIL の視点を取り入れるため、UNESCO の「Media and Information Literacy Curriculum for Teachers」から、カリキュラムを構成している 11 のモジュールから、本研究の主旨と合致するモジュール 3「メディアと情報による表現」、モジュール 4「メディアと情報における言語」、モジュール 7「インターネット接触の機会と挑戦」、モジュール 9「コミュニケーションとメディア情報リテラシーと学習」を選択し、接続期の子ども達の発達に適した内容に構築した。

操作方法では、MIL モジュール 7「インターネット接触の機会と挑戦」に準拠し、「写真やビデオを撮る」「順番につなげる」「編集する」「文字を入れる」「声を入れる」「音楽を入れる」「発表する」「作品を書き出す」を独立した 8 パートで構成した。クラス担任や大学生のファシリテーターと一緒に、一連の操作体験を遊びながら行うことで、メディアの「受け手・使い手・作り手・送り手」の意識を高めることができていた。

表現方法では、MIL モジュール 3「メディアと情報による表現」、モジュール 4「メディアと情報における言語」、モジュール 9「コミュニケーションとメディア情報リテラシーと学習」に準拠し、「写真を撮ろう」「音を入れてみよう」「動きをつけてみよう」「メッセージを伝えよう」「文字を入れよう」の 5 パートで構成した。「ぴったりのサイズ」「ぴったりの音」「ぴったりの動き」「ぴったりの文字」を探していく内容であるので、接続期の期においてもメディアの「受け手・使い手・作り手・送り手」の道筋を追いながら、「情報を伝える」プロセスを理解できていた。



「メディアであそぼ！スタートプログラム編」実践の成果

【接続期前期】の実践では、年長児の子ども達が最新メディアに慣れ親しみ、「受け手・使い手・作り手・送り手」全てを体験したことに意義がある。

まず、操作方法の映像教材を見ながら、教員や大学生のファシリテーターと一緒に、グループごとに最新メディアの基本的な機能と使い方を知った。これは、タブレットとアプリ「ロイロノート」で遊びながら操作スキルを学ぶことで、「メディアを利活用し、目的を共有する・ルール理解して遊ぶ」MIL の基礎につながっている。

次に、表現方法の教材を視聴した後で、タブレットとアプリを用いた制作活動を行った。具体的には、グループの友達と協力して、「ようちえんのおもいで」(写真・絵・造形物等)を探し、各自タブレットで撮影した。これは、自分が考えた「ようちえんのおもいで」をイメージして写真に撮ることで、MIL の「情報手段の特性に気づく・表現したい事物を効果的に撮影する」基本を形成している。

続いて、グループで話し合いながら、アプリを使い、音声メッセージを入れた 1 分間の作品(数人のオムニバス)になるようにまとめた。これは、「自分たちが伝えたいメッセージを音や動きで工夫してまとめる・集団の制作活動を通して思考を表現する」「自分たちのメッセージを、相手にわかりやすく伝える・繰り返し作り直し改善し、思考を深化する」MIL を促進している。



ロイロノートで撮った写真をつなげて作品にする

最後に、作品をプロジェクターに投影しグループごとに発表した。これは、「自分と違う見方があることに気づく・アクティブオーディエンスとして、友達が発信した情報の良いところを見つけることができる・情報の大切さを意識する」MIL の発達につながる。



発表会で自分のグループの作品を紹介する

【接続期中・後期】の実践では、小学1年生が最新メディアを駆使し、「受け手・使い手・作り手・送り手」4者の関係性を意識しながら、「情報を伝える力」を段階的に獲得していった点に意義がある。

最初に、操作方法の映像教材を視聴しながら、1人1台 iPad mini を使い、個々にアプリ「ロイロノート」を練習しマスターした。これは、「最新メディアに興味を持つ・慣れ親しむ・操作スキルを習得する」MIL を意味する。



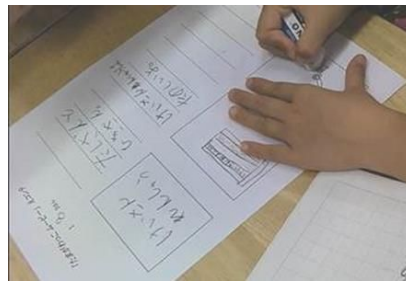
遊びながら感覚的に操作スキルを身につける

続いて、表現方法の映像教材を視聴しながら、アプリを用いた制作活動を行った。具体的には、「たまがわっこムービー（幼稚部の園児達に初等部のよさを紹介）」を作るため、4人1グループになり、各自で紹介したいテーマを考え、はっけんカードに記入し、グループで話し合い、1つのテーマを選んだ。これは、MIL の「情報を伝える力」の前提となる「メディアを活用する目的を共有する・ターゲットオーディエンスを意識する」段階である。



紹介したいテーマについて自分の思いを出し合う

各グループで選定したテーマを元に、個々に企画を絵コンテに書いた。その後で、グループで話し合いながら、個々のコンテでテーマに沿った部分を切り張りしながら、企画コンテを統合していった。これは、情報に対する姿勢を培う「情報の取捨選択をする」MIL の段階である。



自分で考えて作品の流れをコンテに書く



切り張りしてグループの企画コンテにまとめる

企画コンテに従って、1グループでタブレット1台を使い、グループで話し合い、適した素材（写真・映像・絵・造形物等）を選びながら、撮影した。自分達が考えた「紹介したいテーマ」を企画コンテでイメージ化し、写真やムービーに撮る過程は、MIL では「最新メディアを活用する・集団の制作活動を通して思考を表現する」段階に至っている。



企画コンテに沿って算数を勉強している場面を撮る

グループで話し合いながら、音声や文字のメッセージを入れて1分間の作品にまとめた。自分たちが伝えたいメッセージを音・動き・文字で工夫して、相手を意識しわかりやすくまとめることは、「繰り返し作り直す改善の過程を通して思考を深化する・コンテンツを提供するために必要な伝達スキルを振り返る」MIL の発達が見られる。



企画コンテを確認しながら撮った素材を吟味する



グループで話し合い、写真や映像の順番を考える



写真の表情・文字・絵で見せる工夫をする

最後に、作品を電子黒板に投影しグループごとに発表した。これは、自分や友達を送り手として情報を発信することで、「情報を伝える楽しさ・難しさ・大切さを意識する」MILの重要な発達段階に至ったことを意味する。



自分や友達の発表に表現を工夫する楽しさを見出す

本研究において、試行錯誤しながらも遊びから学びへ発展する協同的体験の多様性が認められ、MILの基本概念である「情報を伝える力」を体得する肝要な契機となっていた。

## (2) 今後の展望

本研究の幼小連携スタートプログラムを接続期に投入することで、幼稚園から小学校へ移行する人生事件に接し、マイクロシステムの再組織化や再構築が困難な子ども達にとって、身近なメディアを通じた活動を契機に、滑らかな接続が期待される。同時に、本研究で実践したMIL教育の蓄積が、学校現場が最も希求している「言語活動の充実」の促進に、大いに貢献できると考えられる。

## <引用文献>

駒谷真美、博士論文「幼児期から児童期におけるメディア・リテラシー教育の開発研究」、2006、お茶の水女子大学大学院

駒谷真美、「接続期を意識したメディア・リテラシー教育の幼小連携カリキュラムの開発と実践」(平成19~21年度萌芽研究)  
<https://kaken.nii.ac.jp/d/p/19650248.j>

a.html

お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校 子ども発達教育研究センター、「『接続期』をつくる 幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働」、2008、東洋館出版

UNESCO, Communication and Information, 「Media and Information Literacy Curriculum for Teachers」, 2011,

<http://unesdoc.unesco.org/images/0019/001929/192971e.pdf>

河本佳子、「スウェーデンののびのび教育」、2002、新評論

庄井良信、中嶋博、「フィンランドに学ぶ教育と学力 (未来への学力と日本の教育)」2005、明石書店

文部科学省、「現行学習指導要領・生きる力 学習指導要領等 (ポイント、本文、解説等)」2008

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/1356249.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1356249.htm)

駒谷真美、「幼稚園児のメディア活用と学校図書館メディアに対する保護者の期待に関する研究」、2013、昭和女子大学「学苑」(868)、pp.47-58

## 5. 主な発表論文等

[学会発表](計2件)

駒谷真美、「Fun with Media!」 Start Program of Media and Information Literacy Education for Japanese Kindergartners and Elementary School First-Graders、ICoME (International conference for Media in Education)2014、2014年8月26日、Seoul (Korea)

駒谷真美、Media Literacy Education for Japanese Pre-school and Elementary School Children、NAMLE (National Association for Media Literacy Education) Conference 2011、2011年7月23日、Philadelphia (USA)

[その他]

ホームページ等

<http://komayalab.com/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

駒谷 真美 (KOMAYA, MAMI)

昭和女子大学・生活機構研究科・准教授  
 研究者番号：20413122